神奈川県立総合教育センター研究集録 24:1～4. 2005

小中一貫校に関する研究

―小・中学校の多様な連携のあり方について―

穂　坂　明　範[1]

学校間連携による指導が重要視されている中、小中一貫校についても研究を進めていくことは喫緊の課題である。しかし、県内にまだ、その動きがないため、近い将来開校が予想される小中一貫校を視野に入れつつ、小中連携についての多様な取組を組織、内容、成果と課題等について研究し、そのあり方を探っていくこととした。

はじめに

1976年にスタートした研究開発学校による研究開発の課題の中には、当初より異校種間における教育の連携を深める取組があった。近年には、中高一貫教育、６年制中等教育学校の設置など教育制度の運用をめぐる教育政策が動き出し、学校体系を見直す機運が高まっている。さらに、文部科学省は、学校教育法を改正し、小中一貫教育を本格的に推進する方針を固めた。

また、「小中一貫特区」として構造改革特別区域に認定された東京都品川区では、平成18年度の開校に向けて準備が進められている。

県内では、平成20年度に県立中等教育学校２校の開校が予定されるなど、中高一貫教育に関する動きは活発になってきている。小中一貫校に関しては、今のところ、計画はないが、近い将来のことを考えると、研究を進めておく必要性は十分に認められる。

そこで、小中一貫校の開校を視野に入れつつ、小・中学校のさまざまな連携のあり方を探っていくこととした。今年度、小中連携のあり方を見直した学校と長年にわたる連携の歴史がある学校のそれぞれの取組を紹介する。

研究の内容

１　茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校（連携の充実をめざして）

茅ヶ崎市立第一中学校が県の中学校区小・中相互交流研究推進事業の研究を受けたことをきっかけとして、学区内の茅ヶ崎小学校、東海岸小学校との連携の見直しを進めていくこととした。

⑴　小中相互交流研究推進会議

３校の教師が次の各部会に分かれて意見を交換した。

ア　教科部会

中学校側より、小学校の教科内容を知らないために重複した学習が行われている（例：小学校で行っている鎌倉を見学する学習が中学校でも行われていたことがあるので、教科ごとの会合を持ちたいという意見が出された。小学校英語活動に力をいれているので、中学校の英語の教師による授業を小学校で行うこととなった。

イ　「総合的な学習の時間」部会

教科部会と同様に、小中で同じ内容で行われているという指摘がなされた。小中の連携を深めるためにも情報交換が欠かせないという結論になった。また、同じテーマの場合は、小中での交流を進めることとした。

ウ　学校行事部会

中学校で行われている「地域ふれあいの日」や「中学校の合唱祭の練習」などに小学生を参加させ交流を図ることで互いの学習意欲の高まりに結びつけていきたい。課題は、距離が離れているため、移動に時間がかかることなので、解決策を探っていきたい。

エ　地域連携部会

地域が主催している「オータムコンサート」「交通安全教室」「地域防災」に小・中学生が参加し交流を図っていきたい。

オ　交流部会

児童・生徒理解のための情報交換の場を公開授業後に設定することで教師間の交流も深めていきたい。

⑵　小中合同研修会

夏季休業中に３校合同の研修会を次のように開催し、今日的な教育課題について研鑽を深めた。

ア　不審者対策研修会

神奈川県安全・安心まちづくり推進課のくらし安全指導員を講師として、不審者への対応とさすまたの使い方について研修を行った。

イ　小中連携相互交流研究全体協議会

県立総合教育センターの所員を講師として、「地域との協働による学校づくり」をテーマにワークショップの研修を行った。

ウ　特別支援教育研修会

県立総合教育センターの所員を講師として、「特別支援教育ＬＤ、ＡＤ/ＨＤ、高機能自閉症の理解と支援のために」をテーマに講演会を開催した。

⑶　スクールカウンセラーとの連携による児童・生徒

---

1 研究開発課　研修指導主事

指導

３校を担当しているスクールカウンセラーを招いて中学生の生徒指導に関する話し合いを６年生の時の担任、現中学担任、小中養護教諭が参加して、今後の指導について相談した。専門家が小中の児童・生徒指導のパイプ役になり、密度の濃い話し合いができ、有意義な時間を過ごすことができた。予算の関係で、来校回数が減ってきているので、このような機会を活用することは重要である。

茅ヶ崎小学校では、県立茅ヶ崎養護学校の教師を招いて、特別な支援を必要とする児童への指導方法について毎月会合を開いている。このような取組が３校合同の活動となるよう努力していきたい。

⑷　「総合的な学習の時間」に関する小中連携実践

茅ヶ崎小学校では、今年度は５年生が防災の学習に取り組んでいる。厚木の県総合防災センターを見学したり、校内の防災設備について市の防災対策課の方を招き、説明を聞いたりし、それを「総合的な学習の時間」の発表の場である「茅小博覧会」でまとめ、発表した。

中学１年生も防災について学習しているので、５年生と交流できるとよいのではという話になり、中学校の発表会に参加する事になった。中学では「一中防災ハンドブック」を作成し、小学生、地域の人に配付した。そして、これは、10 月 31 日に行われた地区防災訓練で、参加した地域の人にも配った。

【児童の感想】
この前は、防災プロジェクトのみなさんのお話を聞かせてもらいました。すごく得するお話ばかりで、もし地震や火事などの災害が起きても、いただいたパンフレットを見ればだいじょうぶだと思います。茅ヶ崎の危険な場所など、けっこうあるみたいですね。私達は茅小博覧会というので、防災について学習したことを発表しました。カンパンをおいしく食べるやりかたを研究して、お客さんに実際に食べてもらったり、地震の時のにげかたを劇にしたり、火事の時のけむりのある場所を想定して、体験してもらいました。けっこうつかれました。大変でした。私達にくれたパンフレット、ありがとうございました。

また、11 月に行われる市内の音楽会に参加する６年生への歌唱指導を他の中学校区の合唱部員と、その顧問の教師に協力を仰いだ。合唱部員が４、５人の児童に１人ずつ付き、きめ細かい指導をしてくれたので、大きな成果を上げることができた。

２　座間市立相模中学校（継続的な小中連携）

相模中学校区では、「無理のない息の長い連携」を合言葉に長年にわたり次のような取組を行っている。

⑴　小中連絡協議会

小学校２校と中学校１校で構成されるこの中学校区では、それぞれの学校を会場として年に３回、授業参観と懇談会で構成される協議会を開催している。互いの授業を参観することによって、小学校の教師からは、卒業後の子どもの実態や中学校教師の専門性の高さを実感し、中学校の教師は、小学校児童の年齢差による実態や小学校教師のきめ細やかな指導を実感することができている。懇談会では、それぞれが抱える課題について、特に不登校児童・生徒に関する取組などを中心に話し合っている。また、遠足や総合的な学習の時間に関する取組や内容等について情報交換することにより、これを参考に、学年が進むにつれて、進んで目標がもて、考える力、実践する力、次につなげようとする意欲をもてるようにしている。

⑵　１日体験入学

小学校が中学校と近いこともあり、２校の６年生が来校し、２月の上旬に中学校での１日体験入学が開かれる。まず、生徒会役員により、中学校での生活や授業、学校行事などの説明を行い、その後、各学年の授業を参観する。自分の目で見ることと、自分たちの年齢に近い、また考え方も近い中学生から説明を聞くことで、中学校入学に際しての不安を少しでも取り除き、期待を持って入学できることを目標としている。

⑶　小中合同研修会

教師も経験だけに頼るのではなく、自ら学ぶ機会を設け、小中の教師の意志疎通を図るため、合同研修会を開催している。今年度はテーマを「不登校生徒への対応の仕方」とし、小学生が中学校に入学後不登校になることが多い中、共通理解を持ち指導していくための学びの場として講演と協議を行った。

【教師の感想】
・わかりやすく、生徒の顔を思い浮かべ聞くことが出来た。生徒のことで、親とのトラブルにならないように、親の話を聞く姿勢を持とうと思った。今は一方的に話すことが多く、受容が無くなっている。参考になった。
・講演を聞き、個性なのか、障害なのかの区別がついた。「こうなればいい」と思っていたことが障害のため「出来ないこと」とわかり、生徒を理解することが出来るように思う。

⑷　地域との連携

地域で行っている地域パトロール、青少年健全育成会、青少年フェスティバル、「不登校を語る会」等に参加している。

「不登校を語る会」は座間市全体の小学校、中学校の不登校生徒の保護者で構成されており、月に２回程度、定例会を開き、悩みや登校するための手だてを話し合っている会である。その会から参加依頼があり、「不登校児童・生徒の進学を語る」というテーマで話し合った。

他の地域へも紹介されていたため、他の地域の保護者や小学生の保護者、民生児童委員、不登校学習支援メンバー、中学生の時に不登校で現在高校生の子を持つ保護者などが参加し、不登校という現実を受け入れる一助とすることができた。

また、進学に関して、不登校生徒への進学も以前とは違い、県立、私立、専門的な進学先など多くの情報を提供することができた。

中学校は地域の中にあり、地域の中で支えられ、成り立っていることも忘れてはならないことである。中

学生、小学生を温かく見守ってくれる地域の目は思いやりのある子どもを育てる一つの要因であると思う。

３　南足柄市立岡本中学校（市をあげての幼小中連携）

南足柄市では“21 みなみあしがら子どもプラン”の中で、学校教育を生涯学習の一つのステップととらえ、幼・小・中の一貫性に立った教育研究を進めている。

平成７年度より、市の教育委員会は、基本方針を「学校教育においては、生涯学習の基礎・基本にたち、人間尊重を基盤とし、豊かな心をもちたくましく生きる人間の育成を目指し、家庭及び地域社会との連携を深め、幼・小・中の一貫した教育を推進することが必要である。」と掲げている。岡本中学校区の各幼稚園・小学校・中学校では、南足柄市教育委員会教育研究推進校として、それらの諸施策に取組の一つとして、生涯学習の視点に立ち、幼稚園・小学校・中学校の一貫した教育の推進を目指し、「豊かな心を持ち、たくましく生きる人間をめざして」を統一テーマに、全教育活動を通しての実践研究に取り組んできた。

⑴　教科指導の連携

子どもの発達課題を、乳児期は「信頼感」、幼児期は「自立感」、少年期は「活動性」、青年前期は「自発性」としてとらえ、これを縦軸におき、それぞれの時期に応じた教育内容や教育方法を横軸において、各段階での子どもたちの実態、成長の歩み、未来像を確認しながら、正しい方向へ導く教育実践を積み重ねていくことは、子どもの成長のみならず、教師の資質を向上させる意味からも、大切なことと考えられる。こうした観点から、幼児・児童・生徒の交流、教員の半日体験留学、保育参観・授業参観、職員研修会などを行いながら、お互いの理解を図り、それぞれの学校、幼稚園の指導に生かしている。

ア　幼･小･中職員合同研修会

幼･小･中の全教職員で、合同研修会を開催している。連携教育研究の意義や内容、年間交流事業などの確認をするとともに、各園、各校の研究内容についての理解を図った。また、主な取組の柱である、「教科指導の連携、不登校問題、地域教育力の共有」についても共通理解を図った。

さらに、岡本中学校で、生徒指導研修会･スクールカウンセラーによる研修会を開催し、幼稚園や小学校からも教員が参加して、不登校の実態や、実際の事例などを学習している。

イ　教科指導アンケートによる研修

国語と算数に関して、幼稚園では言語領域・生活領域から、保育上の工夫や問題点を洗い出し、小学校・中学校では国語・算数・数学から、理解度の高い内容やつまずきの多い内容を洗い出した。また、それらに対応した指導上の工夫や問題点も明らかにしていった。

このことにより、園児や児童・生徒の実態や指導上の成果や課題などを共有していくことができた。さらに、幼稚園での保育、小学校・中学校での指導の重点や指導法の工夫改善に役立てるとともに、幼･小･中の指導のつながりを求めていこうとしている。

ウ　読書指導によるつながり

幼稚園では、お話や絵本の読み聞かせ、小学校・中学校では読書タイムや朝読書による読書の時間を設けている。幼稚園ではよい本との出会いを大切にし、言葉から想像のイメージを広げられるようにしている。小学校・中学校では、自ら本を選び、じっくりと読書に取り組むことで、本に親しみ、読書の楽しさを味わわせるようにしている。また、幅広い読書活動を通して、一人ひとりに豊かな心が育っていくことを期待している。

エ　授業参観・半日体験留学による研修

幼･小･中それぞれの授業参観や研究会への参加を通して意見交換を行い、教科指導の連携を深めている。また、半日体験留学も、各幼稚園･小学校･中学校の保育や授業の指導法などを知る上で効果をあげている。学校へ行こう週間での参観や文化活動発表会の参観なども行っている。

⑵　不登校問題への取組

不登校の問題はその根は深く、中学校だけでなく、小学校・幼稚園の年齢でも無関係な問題ではないと考えている。教員の研修を実施すると共に、綿密な情報交換を行っていかなければならない問題である。そこで、５・６月に授業参観と情報交換会を行い、進学後の児童・生徒の様子について話し合い、卒業後の成長ぶりや学習の様子を知ってもらい、意見交換をしている。また、小学校から中学校に進学する段階で不登校になるケースもあるので、事前に小学校６年生に対する中学校の学校説明会、授業参観や部活動参観を行い、入学への不安を取り除き、期待を持って進学できるように取り組んでいる。さらに、スクールカウンセラーによる幼・小・中教員研修会や活用マニュアルの作成などを行い、児童・生徒・保護者への適切な働きかけができるよう、効果的な連携協力をめざしている。

平成 16 年度６月より、岩原小学校と岡本小学校に「子どもと親の相談員」が配置され、児童や保護者の悩みや心配事の解消のための相談活動が今まで以上に充実できるようになり、スクールカウンセラーの活用と相まって不登校問題への取組の充実が図れるようになってきている。

⑶　岡本中学校区地域協力者の共有

どの学校も地域に開かれ、地域の教育力を活用し、地域の要望に応えられる学校をめざしている。これは、いずれこの地域を創っていく子どもたちを育てていく責任があるという考えからである。そこで、地域の教育力を共通して発揮してもらえないかと考えた。子どもたちに体験させたい様々なことを直接地域の方に指

導していただくことによって、地域への愛着や地域のよさを実感できると思い、中学校区で地域協力者名簿を作成することにより、幅広く人材を活用し、地域に開かれた学校・幼稚園をめざしている。

４　愛川町立愛川中学校（中学校への円滑な適応を図るために）

愛川町では、長年にわたり小中の連携に力を入れてきている。そのきっかけのひとつは、中学進学時に不登校になる子どもが急増することであった。この問題の解決のために、小学校と中学校がそれぞれできることと連携して行うことについて考え始めた。小学校２校、中学校１校で構成される愛川中学校区においては、地元の県立高等学校とも連携を模索し始めている。

⑴　小中学校の交流の場の設定

ア　小学生が中学校を訪問する場

11月に５年生が学校集会に参加し合唱発表を行ったり、６年生が進学に向けて２月に生徒会による説明会に出席したりしている。また、体育大会、文化発表会の見学なども行っている。

イ　中学生が小学校を訪問する場

吹奏楽部が秋に２つの小学校を訪れ、演奏を披露している。また、３年生を中心として読み聞かせ会を年間２回実施したり、２年生が、２日間小学校を訪れ、小学校教師の仕事を体験したりしている。

ウ　教師間の交流の場

二期制を導入している愛川中学校では、Ｉ期の期末テストを９月に実施している。そのテスト期間中の午後に２つの小学校で高学年を中心として、中学校教師による授業を行っている。小学校の学級担任なども加わったＴＴでの授業も見られた。授業を行う中学校教師の負担はあるが、準備を夏季休業中に行えるメリットもあり、小・中学校のいずれからも好評である。

【児童の感想】
・中学校の先生は思ったよりやさしかったです。私はハードルはあまり得意ではないけれど、教わったストレッチでできそうな気がしてきました。足抜きの練習では、先生がものすごく速くやっていたので、すごいなと思いました。
・音楽の授業を教えていただきありがとうございました。私は５年生になって音楽が大好きになりました。その時に中学校の先生が教えてくれると聞いてとてもうれしかったです。理由は、私のお姉ちゃんが中学校で吹奏楽部に入っていて、私も入りたいなと思っているからです。先生が教えてくれた歌い方で連合音楽会をがんばります。

11月には、一日交換経験者研修会と呼ばれる異校種校への１日の滞在を行っている。中学校の教師は小学校へ行き、朝の会から参加し、授業を行ったり、小学校教師を手伝ったりしている。小学校の教師も中学校で同様の体験をする。このことにより、教師の交流が深まり、小学生の中学校生活への不安解消に大きく役立っている。今回からは、県立愛川高等学校の教師も中学校を訪れ、指導に加わり、高校生の学校生活などについても紹介した。

これらの他にも、合同研修会や情報交換会を頻繁に行い、児童・生徒の学習や生活について話し合い、共通理解に努めている。

⑵　小学校で力を入れること

３校で話し合い、小学校期には特に、学習習慣を身につけさせることに力を入れていくこととした。具体的には、基礎基本の内容を確実に定着させることと、宿題などを工夫し、家庭学習の習慣を確立することである。

⑶　中学校で力を入れること

学習面の不安を減らすために、授業内容の工夫の推進、１年生の前期に学習の仕方をきめ細かく指導する、テストの意味や取組についての指導を行う、新入生テストの結果を小学校へ資料として送る等の方策を打ち出している。

さらに、中学入学時に感じた生徒の戸惑い等を把握するためのアンケートを実施している。

校種を越えた児童・生徒、教師相互の交流や家庭、地域との連携に視点を置き、不登校、いじめ、暴力行為等の問題行動の未然防止につながる指導のあり方の研究を続けている。

おわりに

小学校と中学校の連携の重要性は言うまでもないが、実際に連携しようとしてみたとき、互いの学校文化の違いが最初の壁となっていることが明らかになった。この違いを批判することなく、率直に認め、互いの学校文化の持つよさを尊重し合い、その中から歩み寄っていくことが重要である。そのためには、連携について研究し、推進していくための学校を超えた組織を構成し、継続的に各学校へ働きかけていくことが不可欠である。そして、その働きかけに各学校が迅速に対応することも大切なことである。

小中一貫校といっても、おそらくは、既存の中学校区の学校をそのまま使用するケースが多いことが予想されるが、教師や児童・生徒の移動の時間や手段をどう確保するか、１単位時間や時程をどのように摺り合わせるのか等運用面での工夫が求められるところである。

［調査研究協力員］

茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校	柴山　比都美
座間市立相模中学校	三浦　千恵
南足柄市立岡本中学校	村山　公秀
愛川町立愛川中学校	高木　光人

参考文献

天笠　茂　編 2004 『学校間・学校内外の連携を進める』ぎょうせい